東京経済大学報

2022年度
第55巻 第2号

巻頭企画

躍動するTKU卒業生

NHKエグゼクティブアナウンサー

古谷 敏郎さん（経営学部卒）

理事長・学長 新年のあいさつ

「全国シニア大学院生研究大会」開催報告

東京経済大学・工学院大学共催　トークセッション

キャリアデザイン・フォーラム2022開催報告

東京経済大学における学生への食の支援

東経大の研究とSDGs　ほか

東京経済大学

理事長・学長 新年のあいさつ

謹んで新春のご祝辞を申し上げます

皆さまには平素より本学へのご支援を賜り、有難く厚く御礼申し上げます。

昨年2022年新春にあたり、「今年こそ新型コロナ感染症を克服し、学生の皆さん方が元気に集い、活躍できることを祈念する」旨ご挨拶させていただきました。振り返って一年間、授業こそ通年対面授業で行うことができましたが、ゼミや海外留学、体育会・文化会の課外活動等は充分な活動を取り戻すには至りませんでした。

明けて2023年（令和5年）は十二支の4番目卯年（兎年）になります。「卯」は元々春の訪れを感じるという意味合いがあり「卯」の形が門を開いている様に見えることから、十干の癸と合わせて「癸卯」は「これまでの努力が花開き、実り始める」という縁起の良さを表しているとのこと、何か明るい希望の萌芽を感じる次第です。しかし現実は、新型コロナ感染症が第8波のピークを伺い、ロシアのウクライナ侵攻も収まる気配なく、世界的インフレの進行、急激な円安等難題だらけであります。

法人経営に携わりこの5月で丸三年、掲げた四つの方針である①新型コロナ感染症に対する的確な対応と学生支援②120周年事業の着実な遂行③財政収支の改善④法人経営を担う人材の育成につきましては、それぞれ残された課題を精力的に進展させていきたいと考えています。

また今年の6月は法人役員の改選期に当たり、新たな役員体制のスタートとなります。体制の若返り、女性の登用等の課題を実現できるよう懸命に検討を行ってまいります。

昨年株式相場での格言を「丑つまずき、寅千里を走り、卯は跳ねる」と記しました。一年を振り返り皆様は如何だったでしょうか？

折角ですので今年は全文を紹介いたします。【辰巳天井、午尻下がり、未は辛抱、申酉騒ぐ、戌笑い、亥固まる、子は繁栄、丑はつまずき、寅千里を走り、卯は跳ねる。】となります。

欲得とは無縁に、ひたすら皆様方の平穏無事な一年を心からお祈り申し上げます。そして一歩でも新たな前進・発展がありますように。

学校法人東京経済大学
理事長
菅原 寛貴

新たな一年、出発に際して

皆さま、新年明けましておめでとうございます。

2020年10月23日に創立120周年を迎えた本学は、今年で創立123年目を迎えます。引き続き、本学を「東京・多摩を代表する大学」、「ずっしりと重い存在感のある大学」にすべく全力を尽くしたいと思っています。

2019年12月に中国武漢で初症状が報告された新型コロナ感染症は瞬く間に世界に広がり、丸3年が経過した今もその終息の兆しを見せていません。この間、本学の教育・大学運営は大きな影響を受けました。しかし同時に、コロナ禍の下でも学生がキャンパスで成長を実感できるような「活気ある大学づくり」に教職員一同努めてまいりました。

今年度の授業は、緊急事態宣言等で中断されることなく、大講義など一部の授業を除き、対面で行うことができました。私が毎週行っている自主的な学長ゼミも、毎週図書館１階のブラウジング・コーナーにて対面で行っています。参加者が同じ場を共有することによって相手の表情や声の調子も直に伝わり、議論もおのずから白熱してまいります。

さらに嬉しいのは、対面での行事も徐々に増えていることです。何よりも葵祭が3年ぶりにキャンパスで対面開催されました。葵祭開催中の10月29日には葵友会全国支部長会議が６号館大会議室にて3年ぶりに開催され、私は皆さまの顔を拝見しながら晴れがましい気持ちで挨拶することができました。

6月の久木田重和先生追悼記念シンポジウム、7月の色川大吉先生追悼記念シンポジウム、11月の「地域再生と自治の相関に関する国際シンポジウム」、さらには11月の「全国シニア大学院生研究大会」なども対面で実行することができました。

今年は、葵友会の各支部にも可能な限り積極的に出向き、皆さまと直接お話しする機会を増やしたく思っています。皆さま方の一層のご理解とご協力を、よろしくお願い申し上げます。

東京経済大学
学長
岡本 英男

躍動する
TKU
卒業生

NHKエグゼクティブアナウンサー
古谷 敏郎さん
東京経済大学経営学部卒業

放送の現場でものを言うのは「人間力」濃密な学生時代がその礎を築いてくれた

多様な業界で活躍する東京経済大学の卒業生が登場するスペシャル企画。今号は、NHK「ひるまえほっと」でもお馴染みのエグゼクティブアナウンサー、古谷敏郎さんに話を聞きました。

FURUYA TOSHIRO
1965年、東京都生まれ。東京経済大学経営学部卒業後、89年NHK入局。奈良、松山、大阪、札幌に勤務。現在、東京アナウンス室で「ひるまえほっと」「古典芸能への招待」などのキャスターを務める。

素晴らしい先生方との出会いに恵まれて

――東経大を選んだのは、一冊の本がきっかけだそうですね。

アルバイトをしながら浪人生活を送っていたある日、八王子の古本屋で偶然出会ったのが、『大学でいかに学ぶか』という本でした。著者は歴史学者の増田四郎さん。一橋大学学長を経て、のちに東経大の理事長になった方です。「大学とは、教授も学生も学問を追究する同じ学徒として、忌憚なく交流し互いを高め合っていく空間だ」といった内容に、当時の私は新鮮な驚きを覚えました。

それで「大変感銘を受けました」と手紙を差し上げたんです。すると増田先生から心のこもったお返事をいただき、手紙のやり取りが始まりました。それで、こんな素晴らしい先生がいる大学ならば、と東経大を受験しました。

――色川大吉先生との出会いは、大変な衝撃だったとか。

僕が1年の時、色川先生は「天皇制と民衆」というテーマで日本史の授業を開講していました。その最初の授業で、色川先生は影響を受けた歴史学者・石母田正さんの話を引き合いに出し、学問の可能性について滔々と語られたんです。僕は感激のあまり、その場で「まだ1年生ですが、ゼミに参加させてもらえませんか?」と直談判。そんなに興味があるならと、二部(夜間)の色川ゼミにオブザーバーとして加わらせてもらうことになりました。

すると、そこはまさに梁山泊、大変な世界でした(笑)。会社員、研究者、他大の学生、主婦と背景は違えど、皆ディープな色川ファンばかり。夕方からゼミが始まり、終わると教室から飲食店に移動して2コマ目。さらにその後は学生の下宿に移動してギュウギュウ詰めで3コマ目(笑)。この時間帯には〝色川節〟も絶好調です。毎週、終電ギリギリでした。

それにしても、あの濃密な時間は得難い経験でした。政治、社会、経済と幅広い時事ネタを語り合うのですが、例えば「僕はこう思うんです」なんて軽々と言おうものなら、ゼミの〝牢名主〟みたいな人に、「それは誰かの受け売りだろう。自分の考えのように話すのはおこがましい」とピシャッと言われたりして。そういうやり取りを色川先生はにこにこ聞いていたり、茶々を入れたり。

当時の仲間とはその後も交流があって、昨年7月の色川先生の追悼シンポジウムにも一緒に参加させていただきました。

――ほかに、宮崎義一先生のゼミで学び、学内の懸賞論文にも応募しています。精力的ですね。

数々のベストセラーを書かれている経済学者の宮崎義一先生のもとで、「現代資本主義と多国籍企業」というテーマで研究していました。当時の僕は半分も理解できていなかったかもしれません。ただ、先生と2人で歩いているときに、ふと「自分の夢を叶えるためには、この場所・この時間で何を得て、それをどう次に繋げるかを戦略的に考えなさい」という助言をいただいたことがあるんです。社会人になってからもずっと心に留めている言葉です。

奨学懸賞論文にも参加しました。2年次には、あだち充の漫画が人を惹きつける理由を考察した「18ページのユートピア」を執筆。人生初の論文でしたが、佳作をいただきました。3年次には、大学主催の「訪中団」に参加し、北京や上海で感じたことをもとに「『体験すること』にどんな意義があるか」という論文にまとめて、3等をいただきました。

背伸びして知らない世界のことを論じるのではなく、まず身の回りの具体的なものに焦点をあてそこから掘り下げていく、といった姿勢は、色川ゼミで叩き込まれたものかもしれません。

就職活動は直球勝負 迷った末に放送界へ

――アナウンサーの仕事にはいつから興味があったんですか。

小学生の頃にNHKのクイズ番組を見ていて、司会者って不思議だなと子供心に思っていたんです。歌も芝居もしないのに、その人がいると和やかになったりゲストが面白い話を始めたりする。「この相川浩アナウンサーって人はすごい」と思っていました。

大学1年の秋、偶然手にした東経大新聞に、その相川浩さんがOBとして紹介されていたんです。驚きました。昔見ていたあの人は卒業生だったのかと。お会いしたい、という一心からその後のアクションは早かった(笑)。すぐに相川さんに手紙を出し、その後、NHKを訪ねて3時間もお話を聞かせていただきました。

そこで相川さんに釘を刺されたのは、「この世界はコネクションや先輩後輩の繋がりは通用しない。ましてやアナウンサーなんて実力一本の世界だから、なりたいなら直球勝負で頑張るように」と。それから、「現場では学歴は関係ない。ものを言うのは人間性や発想力、経験値。だから、学生時代のうちにできる体験をたくさんして有効に過ごしなさい」と。東経大での一日一日を大事にしよう、チャンスはとことん生かそうと思ったのは、この時、相川さんにいただいたアドバイスが大きく影響しています。

――就職活動は順調でしたか。

いいえ、全く。東京のキー局はことごとく一次で落ちました。放送研究会やアナウンス学校の経験すらない自分ではやはりダメかと意気消沈しました。ところが、最後のNHKだけは雰囲気が違った。じっくり話を聞いてくれるので、ゼミに、訪中団、懸賞論文、さらに趣味のマジックについてなど、話すネタはいくらでもありました。5～6回、そんな面談を繰り返した後に筆記試験等を経て、念願の内定をもらうことができました。

ところがその後、自分に務まるのかと急に怖気付いてしまったんです。実は国税専門官の試験も3年次に合格しており、その方が堅実な道ではと迷い始めました。

そこでまた相川さんのもとへ。相談すると、全国に500人ものアナウンサーがいる中で、東京で担当番組を持つまでにご自身がどれほどの努力を重ねてきたかを話してくれました。そんな茨の道なのか……と現実を知り、やはり諦めようと心を決めました。

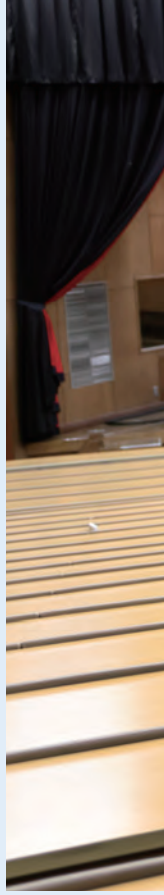
ところが帰り際に相川さんがボソッと言ったんです。「まあ、放送の仕事は向き不向きがあるから、何が幸せかはわからないよ。ただ、番組を作る仕事っていうのは、毎日が文化祭みたいなものだよ」と。すると、もうその言葉が頭から離れない。中高生時代、吹奏楽部だった僕にとって文化祭は青春の全てでした。え、あんな面白い仕事なの!?と(笑)。結果、清水の舞台から飛び降りるつもりでNHKに入局しました。

アナウンサーが話術より大事にすべきことは

――NHKに入局した当初は、失敗続きで大変だったとか。

初任地は奈良放送局でしたが、それはもうひどいものでした。ラジオのニュースでは、つっかえる度に時間が押して最後まで読めない。テレビでも失敗ばかりで、生放送中にデスクがニュース原稿を短くしてなんとか帳尻を合わせるといった始末。完全にアナウンサー失格です。しばらくはテレビに出させてもらえない日々も続きました。

転機になったのは、夏の高校野球のスタンドリポートでした。自分で取材したことを伝えるとなると、水を得た魚のように自然にできたんです。この年の代



「毎日が文化祭のようなもの」その言葉が、人生を決めた

表校は、智辯学園。選手や監督、コーチ、選手の親御さんたちに取材して、ネタを集め、構成を考える。こうした作業は大学のゼミでも叩き込まれていますから、むしろ得意だし面白い。「奈良放送局の古谷は、ニュースは下手だがリポートのセンスはある」と先輩方に覚えてもらうきっかけになりました。

つくづく思ったのは、アナウンサーに大切なのは、しゃべりの巧さではないということ。相手からいかに話を引き出せるか、そしてそれをいかに正確に、分かりやすく、そして面白く伝えられるかが大事だとわかったんです。そこに気がついてからは、俄然、仕事が面白くなっていきましたね。

――阪神・淡路大震災の際は、現地入りしたそうですね。

95年当時、四国の松山放送局にいた私は、最初の報道陣として震源地の淡路島北淡町に入りました。余震もある中で1時間に1回ずつ現地からリポートしました。震災当日の夜、役場で夜を明かすことになったのでベンチに座っていると、深夜なのに人がやって来るんです。何か話を聞くべきだとは思いながらも、この状況で「NHKですが」と言うのは違うと思った。名刺や肩書きなんて通用しない、人と人との関係性ですよね。たしか、「寒いですね」「お疲れさまです」とお声がけしたような記憶があります。

なかには、ご家族の死亡届を出しに来た方もいました。「家が全壊して、隣の部屋の娘を助けに行けなかったんです。『助けてお父さん』『熱いよ』って声が聞こえるんだけど、どうすることもできない。それでその声がね、段々小さくなっていくんです……」。途中からはメモをとることすらできず、僕はただじっとお父さんの話を聞いていました。

翌日の合同慰霊祭では、前夜に聞いた話も交えてリポートしました。いまでも忘れられない、心に刻まれている仕事の一つです。

自分が得たものを次の世代に伝えたい

――いま、平日昼間は毎日、「ひるまえほっと」に出演されています。

放送はつくづくチームワークの仕事だと、日々実感しています。

例えば、外からの中継で鳥の声が聞こえた。僕の耳には聞こえたが放送に乗ったかなと思って音声さんに視線を送ると、OKのサイン。すると僕は「ウグイスのさえずりが僕らを歓迎してくれているようですね」と臨場感を伝えられる。現場での阿吽の呼吸がなせる技です。カメラマンやスイッチャーも同様。例えば「まさに全身から力がみなぎるようで……」と僕が言うと、カメラマンはゲストの足元を映す。その瞬間、スイッチャーが絵を切り替え、カメラマンがパンアップを始める。僕は〈待ってました〉と話を広げていく、といったように。実は生放送というのは、多くがそんな台本を超えたアドリブの連続なんです。

その瞬間、その場でしか生まれないものがあり、それを生かしてより良いものを届けようとするチームワークがある。そんな現場に身をおけるのは、アナウンサー冥利に尽きます。やっと、〝文化祭〟の醍醐味を感じる余裕が生まれてきたのかもしれません。

――今後のアナウンサー人生をどう考えていますか。

あと2年ほどで僕は定年退職を迎えます。これまで、古典芸能の分野をはじめ、数々の番組を作らせてもらいましたし、昨年も8年越しの提案が実り、「マジック界のオリンピック」といわれるFISMという大会を取材して、企画者兼司会者としてマジックの魅力を伝えることができました。

一方で、一昨年から「記者解説勉強会」を始めました。ニュース解説をする記者の「伝えるスキル」を上げるべく、思いを同じくする解説委員とともに「出前講義」に取り組んでいます。

今年はテレビ放送が始まって70年、さらに2025年にはラジオ放送100周年を迎えます。大きな節目にあって、先人から学ぶことはたくさんあります。昨年は、大先輩の宮田輝アナウンサーについて、一冊の本にまとめました。

かつての僕が、諸先輩方から多くの影響を受けたように、今度は僕が30数年かけて掴んだものを次の世代に伝えていきたい。とはいえメディアは日進月歩。志ある若い世代からは僕の方が学ばせてもらう事も多いんです。切磋琢磨し、いい番組を作っていきたいですね。

――東経大生にメッセージを。

「人生には炎の時もある、灰の時もある」という色川先生に言われた言葉をそのまま贈ります。つまり、燃え盛り勝負をかける時がある一方で、じっと静かに待つ時もある、ということ。僕にとって東経大の日々は〝灰の時〟、つまり社会に出る前にふつふつと力を蓄えていた時期だったのかな。皆さんも、東経大で素晴らしい時間を紡ぐよう願っています。

Event report

「全国シニア大学院生研究大会」開催報告

経済学部専任講師　新井田　智幸

シニア大学院制度を先駆的に導入した本学において、大学院の枠を超えてシニア大学院生を集めた研究大会が全国で初めて開催されました。

2022年11月19日(土)、本学大倉喜八郎 進一層館(フォワードホール)において、全国シニア大学院生研究大会が開催されました。本学ではもちろんのこと、全国的にも初めての企画でしたが、盛況のうちに終えることができました。

本学は全国に先駆けて2006年にシニア大学院制度を創設し、社会人経験を経た後に研究を志す院生を受け入れてきました。既に50名以上の修了生を輩出し、現在も約20名のシニア大学院生が、日々研究を行っております。ここでは、現役の院生だけでなく、OBも含めた院生のネットワークが築かれ、研究を互いに高め合っています。

しかし、同様の制度が全国各地の大学院でも増えてきており、シニア大学院生も数多くいるにも関わらず、大学院の枠を超えて院生同士が研究を発表したり交流したりする場はあまりありませんでした。そこで、そのような研究発表の機会を作ることを目的に、今回の全国大会を企画しました。

今大会では、他大学院から応募のあったシニア大学院生の報告6本と、本学大学院の各研究科のシニア大学院生の報告4本が発表されました。北海道から岡山まで全国各地から報告者が集まり、経済学、経営学から、社会学、教育学、さらには建築学にいたるまでの多様なテーマで研究報告がなされました。(各報告の概要は、後日発行される研究大会報告集をご覧ください。)来場の参加者数は66名を数え、報告者や運営スタッフを加えれば80名以上の参加で、盛会となりました。

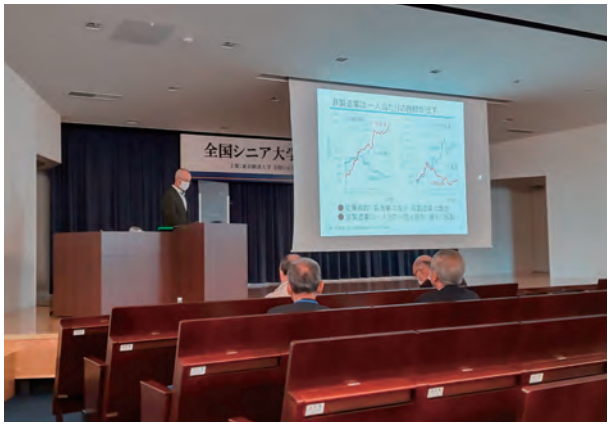
そして何より素晴らしかったのは、研究発表の内容が充実していたことです。研究の水準も高く、それを限られた時間で報告する発表のまとめ方も、よく準備されていることが伝わるものばかりでした。また、各報告に対する質疑応答も、常に複数の参加者から手が挙がり、とても活発に交わされました。普段はあまり接することのない他分野の研究者との討論は、互いに大きな刺激になったことと思います。非常に熱のこもった大会となりました。

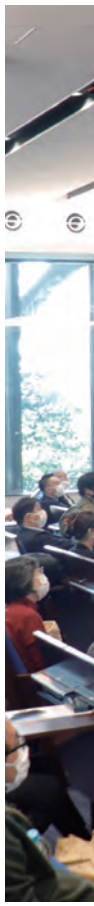
また、今大会を記念して、上野千鶴子氏（東京大学名誉教授）による「学問は生涯の極道」と題した講演が行われました。社会学やフェミニズムの大家である上野氏ですが、「おひとりさま」の老後の生き方についても論じているほか、立教大学でシニア大学院生を多数指導していた経験もあり、講演ではそうした経験をふまえて、シニア世代が学問に取り組む意義について語ってくださいました。上野氏は、学問それ自体が他の活動に比べて高い価値を持つとは考えないという姿勢をはっきり示す点で研究者として独特ですが、趣味活動としての学問は生涯やり続けられるものであり、それに打ち込めることが有意義であると論じておりました。講演タイトルにある「極道」とは、その文字通り、「道を極める」ことであって、自分が興味を持ったことをとことん突き詰めて考えることが学問という活動です。その対象は何でもよく、身近な小さなことを追究する自己満足としかいえないようなテーマであってもかまわないどころか、そういうテーマこそ打ち込みがいがあると推奨されていました。実際、上野氏の下で研究していたシニア院生は、自分の人生史のなかで自分にとって大事なことを考えるという研究を各々行い、それを修士論文などの形にすることで、大きな満足を得て修了していっているとのことでした。そして、大学院を出てからもそのような学問はし続けられます。例え足腰が弱っても、生涯行うことができる活動として、学問は最高の趣味であるというのが、講演のメッセージでした。終始軽快な語り口での刺激的な内容で、参加者からも大好評であった特別講演でした。

大会終了後には、報告者を中心とした交流会が開かれました。報告を終えての感想や応募した動機などが語られ、充実した表情で交流している姿が印象的でした。全国のシニア院生間の交流を促進したいという企画の目標は、ささやかながら達成できただろうと思います。

大会の運営には現役のシニア大学院生のほか、シニア大学院ＯＢの方々にも多数ご協力をいただきました。報告や質疑応答の進行も担当してもらいましたが、長年の大学院での研究活動の経験から、素晴らしいチームワークで計画通りに進行してもらうことができました。これぞ本学の大学院の底力だといえるでしょう。

今大会は大学における研究活動を活発にし、大学の研究機関としての役割を高めることに貢献するものだったと評価できます。今後も同様の企画を続けることができれば、大学院間のシニア院生の交流の拠点として、全国から院生が集う場所となることでしょう。本学の魅力をさらに高められる企画として、今後さらにこの研究大会が発展していくことが期待されます。





Tokyo Keizai University × Kogakuin University Talk Session

東京経済大学×工学院大学共催 トークセッション

2020年5月に本学と包括的な法人連携協定を結んだ工学院大学と共同で、双方の大学創立の歴史を振り返り、現在と未来を共有するトークセッションを3回シリーズで開催しています。本誌面では10月25日に工学院大学の新宿キャンパスで行われた第1回、11月11日に東京経済大学国分寺キャンパスで行われた第2回の模様をお伝えします。

第1回 それぞれのルーツから未来へ 大倉喜八郎と渡邊洪基

偉大な創立者二人の素顔は勇猛果敢な冒険者

第1回のテーマは「それぞれのルーツから未来へ　大倉喜八郎と渡邊洪基」。開演に先立ち、工学院大学の新宿キャンパスにあるアトリウムのキネティックウォールには、双方の大学の研究キーワードをワードクラウドで可視化したインスタレーションが映し出されました。

はじめに伊藤慎一郎工学院大学学長の挨拶。東京経済大学と工学院大学は「根っこが同じである」という話とともに、明治期に経済や教育分野で日本の発展を支えてきた大倉喜八郎と渡邊洪基が、各大学の創立に深く関わっていたことから、両校が2020年に法人連携協定を結ぶに至ったと説明がありました。

第1部は、本学の村上勝彦名誉教授が、大倉商業学校（東京経済大学の前身）創立者である大倉喜八郎と、工手學校（工学院大学の前身）創立者の渡邊洪基の人となりや活動について講演しました。

大倉は陽明学で学んだ実践的な「進一層」と、商売における「責任と信用」を信条として新事業に意欲的に取り組み、それが現在も本学理念として受け継がれていることなどが紹介されました。政治や教育、外交、実業と広く活躍した渡邊は、能弁ではないが名文家で知られ、上申書や意見書で考えを相手に強く訴えた人物であり、夫人同伴で海外赴任した外交官第1号であるというエピソードも明かされました。

大倉と渡邊は新事業に果敢に取り組むベンチャラーであり、その二人にとって共通の最重要人物が伊藤博文でした。伊藤夫妻は大倉の息子の結婚式で仲人を務めたほど親しい間柄。伊藤と渡邊とは現実主義的かつ漸進主義的な改革を目指す名コンビであったということです。

両大学の学生と職員が交流し視野を広めてほしい

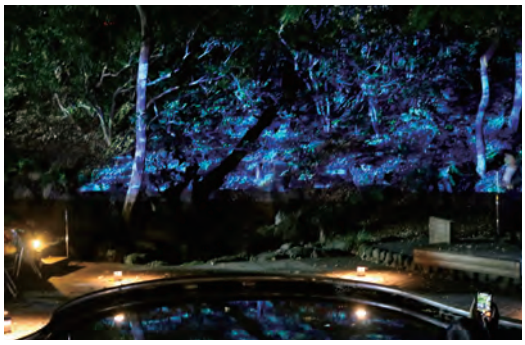
第2部は、後藤治工学院大学理事長と本学岡本英男学長のトークセッションを行いました。

技術者ではない渡邊洪基が工手學校創立に関わったのはなぜか？　それは、熱意はあるが財力に乏しい技術者に代わり財界とつながって資金を集めたためで、そこに実業家大倉喜八郎の存在があったこと。その10年後に大倉が大倉商業学校を創立する際、国内外で活躍できる商業人の育成の必要性を感じ、指南役として渡邊を頼ったことを紹介。渡邊と大倉はそれぞれの学校創立における「表」と「裏」の関係だったのではないかと思いをめぐらせました。

現在、両大学に共通する特徴は実学であり、本学は「考え抜く実学」、工学院大学は「21世紀工手の育成」とキャッチフレーズも紹介されました。最後に、本トークセッションをきっかけに学生や職員同士も交流して視野を広げてもらいたいと今後への期待が語られました。

第1部の講演をする村上勝彦名誉教授

トークセッションの様子
（右：岡本学長、中央：後藤理事長）



第2回　まちづくりから考える地域と暮らし ～SDGsを視野に入れて～

工学と社会科学の観点から まちづくりを研究

第2回は、本学国分寺キャンパス「東経の森」にて、「まちづくりから考える地域と暮らし ～SDGsを視野に入れて～」のテーマで開催されました。

新次郎池がある「東経の森」に映し出されたインスタレーションは池の水面にも映り、デジタルと自然の融合がトークセッションを美しく彩りました。

本学の菅原寛貴理事長は冒頭の挨拶で、新次郎池のほとりに生息するフタバアオイを紹介。春になると二枚の葉の間から小さな花を咲かせることになぞらえ、両大学の提携も毎年きれいな花が咲くことを願うとしました。

第1部は、野澤康工学院大学副学長と本学の羽貝正美副学長より、SDGsにつながる各々の研究が報告されました。

都市計画やまちづくりが専門の野澤副学長は、公園や空き地などの公共空間を市民が積極的に使いこなしていくプレイスメイキングの取り組みとして、「まちなか黒板」などを作った事例を紹介しました。

羽貝副学長は、多数で多様な市民が生きるまちづくりについて報告しました。市民、行政、議会からなる自治体が「共同」と「協働」を大事にし、連携して進めることの大切さや、まちづくりにおける学際性の高い研究を行っていることなどが語られました。

まちづくりに完成はない 継続性が何より大事

続く第2部は、羽貝副学長と野澤副学長による「まちづくりから考える地域のくらし」のトークセッションが行われました。

羽貝副学長は八王子市の「小田野中央公園」づくりの4年間を報告。災害時用トイレの設置など市民のアイデアを取り入れたことや、現在も花壇の整備などが継続して行われており、近隣からは「つくり終えない公園」という声を聞くと話がありました。その言葉を受け、野澤副学長も「まちづくりも完成しない」と共感。まちづくりには継続が重要であると意見が一致しました。

一方で、活動をどう地域に根付かせ自立してもらうかというタイミングの難しさについて野澤副学長から話題が出された際には、事前に節目を設ける必要性と同時に、我々とまちが共有したものが育ち、なおかつ何らかの形で関係性が続くことへの期待について羽貝副学長より意見が述べられました。

本学のSDGsの取り組みとしては「こくベジ（地場野菜）」、課題解決型ボランティアサークル「こくスマ！（国分寺×スマイル）」の活動や、2021年の東京経済大学SDGs宣言から今年5月のSDGs学生委員会発足に至る流れが報告されました。

さらに、両副学長は省エネや弱者を置き去りにしないまちづくりはSDGsの観点から非常に重要であるとし、それをどう実現していくかが大きなテーマであり、実際にまちに出て今を知ることが第一歩ではないかなどと語り合いました。

第2回トークセッションの様子（右：羽貝副学長、左：野澤副学長）

キャリアデザイン・フォーラム2022開催報告

コミュニケーション学部特命講師　田村 寿浩

2022年10月12日(水)、本学・大倉喜八郎 進一層館フォワードホールにて「キャリアデザイン・フォーラム2022」(キャリアデザインプログラム主催)を開催しました。キャリアデザインプログラム(以下CDP)の「生涯にわたる自己のキャリア形成力をはぐくむ」というプログラム理念を念頭に、キャリアに関するテーマについて大学教育の枠を超え議論を深めていくことを目的に開催しているもので、2019年度に続き2回目の開催となります。

今回は、昨今のコロナ禍で学生の成長が鈍化していると言われる中、頼もしく成長しているCDP生が多くいると教員側が実感し、当該学生らにヒアリングを行ったことから企画がスタート。学生自身が、自分たちがいかに育ったのかを自ら振り返ることが重要であることに気づき、教員の伴走のもと3か月かけてその探求を行いました。またその探求による事例の提示と成長を促す要素についての議論は、同じく組織のニューカマーである企業の新入社員教育にも有益な内容なのではないかと考え、今回は「コロナジェネレーションの育ち方～大学と企業の視点から～」とテーマを設定。企業視点での実例の提示と提言を(株)サイバーエージェント常務執行役員CHOの曽山哲人氏にお願いし、ご登壇いただきました。

当日は大学教職員、学生、企業の人事関係の方々など、会場に44名、オンライン中継に62名、計106名の方が参加されました。

プログラムは、【教員報告】(大学での教育の実際)、【学生発表】(学生自身の成長の分析)、【特別講演】(企業での実践)の3方向から事例等の提示を行いました。

【教員報告】では、CDP運営委員の小山健太准教授から、実際には全国でも6割近い大学生が「ほぼオンライン授業だった」と答える中、CDPではそのオンラインでのワークショップをいち早く実施し、かつ、対面での機会を早期に設け、ヨコ(同期)とタテ(CDPの先輩と後輩)のつながりを作ったことなどの工夫と、CDP生のコンピテンシーの高さなどが語られました。その後【学生発表】では、CDP4期生の小林桃子、花岡瞳衣、福澤愛衣の3名(現コミュニケーション学部3年生)から、自分たちの育ちの軌跡と成長を促す要素について発表がなされました。コロナ禍によって必然的に環境が変わった状態から、他者との関係を作りながら状況を変化させていき、最後は自身の成長のため自ら能動的に環境を変えていくというプロセスがあったことが語られ、また成長には「(他者との関わりでつけた)自信が新たな行動を促し、そこで成功も失敗もして経験を積んでいく」というループが構造としてあると述べました。そして【特別講演】では曽山氏から、コロナ後の自社の働き方促進、組織づくり、育成について具体的な施策が紹介され、コロナ禍だからこそいかに効果的に対話を生み出すか、また組織目標の共有と組織員相互の「信頼残高」の醸成がいかに重要であるかが語られました。その後パネルディスカッションでは、曽山氏より、学生が自らの経験を言語化していることへの評価があり、その言語化が成長を促す大事な要素であることが語られました。また、オンラインの良さと対面でのリアルさを両輪で廻していくことが重要であること、そこには成長を促す良質な「コミュニティ」の存在が不可欠であり、その構築については関係者(教員、学生、企業の育成担当者、新入社員等)がそれぞれ試行錯誤をしながら具体的に参加し関わることが重要である、という視点等が出され、フォーラムは終了しました。

参加者からは、「大学生のリアルな状況が分かった」「自分の企業での人材育成の参考にしたい」といった声が寄せられ、フォーラム自体がとても動的で予定調和ではない展開であったことが評価されたと思われます。私自身もパネルディスカッションの進行をしながら、学生たちがその場で展開される問いに自分の発露で堂々と答える場面に驚き、そこから話題が展開していくという、とても貴重な体験をすることができました。

また今回は、3年生を中心に18名のCDP生が本フォーラムの準備・運営を行いました。来場者、オンラインでの参加者、また登壇者がスムーズに参加でき、いかに対話や気づきが生まれる環境を提供できるかを自分たちで考え準備・運営を行ったことも、本フォーラムが生み出した一つの「成長」の場面でした。結果、今回はフォーラム開催までのプロセスや本番のその瞬間がまさに学生たちの「育ち」が醸成される場であったと考えます。

CDPでは今後も、学生たちの成長を念頭に、その時代に沿ったテーマを設定し、キャリアに関する情報発信・提言の場を作っていこうと考えています。

東京経済大学における学生への食の支援

総務課長　橋本 博一

新型コロナウイルスや価格高騰にあえぐ社会情勢の中、多くの学生が経済的に困窮している現状に鑑み、本学では2022年9月21日から、大学補助により生協食堂の全メニューを30％引きで提供する経済支援を行っています。この支援は全国初の取り組みです。

30％引きの食堂メニューを一部紹介しますと、カレーライス（中）201円、かけうどん（中）178円。チキンチーズカツトマトソース216円にライス（中）70円と豆腐とわかめの味噌汁24円を付けて合計310円等、とても割安な料金で食事ができます。

この支援を行うこととなった背景には、2022年6月から7月にかけて学生に行った食の支援に関するアンケートが大きく影響しています。このアンケートからは学生の切実な叫びが聞こえてきました。いくつかの声を紹介いたします。

「一人暮らしをしており、アルバイトの収入だけでは生活は厳しいため、一日一食など、食費の面を削りながら生活をしています。」「毎日のお昼ご飯に使えるお金が300円程度しかない状況です。」「学内で昼食をとることを躊躇することがあります。」「食料品の購入は月に2回が精一杯です。」「毎日カップラーメンを食べて生活をしています。」「親からの仕送りもないため、自炊などを行って節約を心がけているが、月末になるともやしを大量に食べる食生活になっており、経済状況および食生活は困窮しています。」「昼は毎回お金がないので学食は利用したことがなく弁当です。学食を食べてみたいです。」

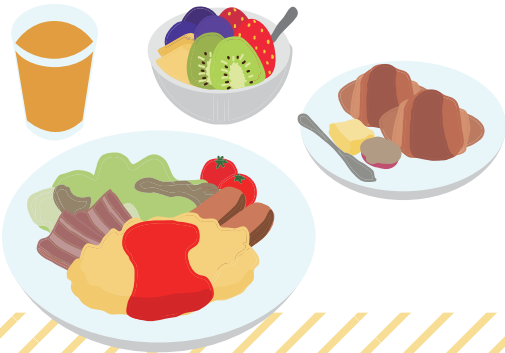
このように学生の食の状況が切実であることが明白となり、大学としてはできる限り早期にそして直接的に支援を行うことが必要であると考えました。割引額については、10％引きや20％引きでなく、思い切って30％引きに設定しました。30％引きであれば、500円の定食を350円で食べることができます。安くなった差額分で大盛りや副菜のサラダなどをもう一品追加することもできます。

この30％引きについて、学生からは「安くて嬉しい」「生活費の負担軽減になる」「何を食べようかな」などの声とともに食堂に笑顔が増え、お昼の開店時間前に店前で並ぶ学生の姿を見かけるようになりました。

この「全メニュー30％引き」という食の支援に加えて、2014年から始まった父母の会による「100円朝食」も継続実施しています。朝の8時半に食堂を覗くと、大勢の学生がバランスの取れた朝食をおいしそうに食べています。

また、昨年も行った日本学生支援機構の助成事業を利用したミールクーポンの配付を今年度も行っています。これは経済的に困窮している学生を対象として、2022年度は550円のミールクーポン10枚を1セットにした5,500円の支援を420名の学生に行っています。

本学では、朝は100円朝食、お昼は30％引きの支援で栄養価の高いバランスの取れた食事をお腹いっぱい食べてもらいたいと考えています。お腹が空いていては勉学にも身が入りません。勉学に課外活動に、東経大生の学生生活が健康で充実するよう応援しています。



Tokyo Keizai University SDGs

東経大の研究とSDGs

経済学部 教授　野田 浩二

私は環境経済学・環境政策論、とくに水政策のグリーン化の国際比較に長年取り組んできました。日本ではあまり知られていませんが、世界的にみると、水問題は大きな課題です。1980年代に入ると、これまでの行きすぎた水資源開発を反省し、環境利益を保護するような水政策への転換が始まりました。私はこれを、水政策のグリーン化とよんでいます。このような制度改革は米国や英国で先行的に実施されています。そこで、これらの制度改革の実態をまとめたのが拙著『緑の水利権』です（写真1）。

さらに、ダム撤去もひとつの具体例です。ダムによる生息地の分断は、河川生態系（とくに海と川を行き来するサケやマス）に大きな影響を与えます。米国では、「あるがままの流れ」（free-flowing）を取り戻すために、ダムの撤去が進められています（写真2、写真3）。

気候変動が激しくなる中、人も環境も質の高い水をさらに必要としています。従前の過剰開発から脱却し、環境と調和の取れた水利用の確立がますます社会的に求められています。私も水問題の解決に貢献していきたいと思います。

写真1
『緑の水利権』
（武蔵野大学出版）

写真2
河川再生のため撤去された米国ダム

写真3
クラマス川再生のために撤去予定のダム

東京経済大学へのご寄付について

東京経済大学へのご寄付につきましては、卒業生、ご父母をはじめ学内外の多くの皆様からご支援ご協力をいただいております。皆様のご厚情に深く感謝申し上げます。

昨年は寄付金顕彰制度を制定し、それに基づいた「寄付者顕彰式」を昨年十月に本学にて開催しました。新型コロナウイルス感染症による影響等により、参加者は限定されましたが欠席者を含め二十一名(法人一社含む)の方に感謝状と記念品を贈呈させていただきました。併せて、昨年十一月に新たに恒常的な寄付金制度「『進一層』募金」を制定し十二月から募集を開始いたしました。

今号では、前号掲載以降にご寄付をいただきました皆様のうち、ご本人様のご了解をいただいた方のみご芳名を掲載させていただいております。引き続き皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

二〇二三年一月

学校法人　東京経済大学
理事長　菅原　寛貴
東京経済大学
学長　岡本　英男

新規寄付金制度「『進一層』募金」

大学が募集する寄付金を総称して「『進一層』募金」としました。

具体的な募金の項目は以下のとおりです。

(1) 学生支援奨学募金
(学生支援のための募金として)
・大学奨学基金寄付金(奨学・修学支援に対して使用)
・安城記念奨学基金寄付金(大型資格取得を支援)
・アドバンストプログラム推進基金寄付金(学外専門学校での講座受講料助成)
・国際交流奨学基金寄付金(国外留学、私費外国人留学生への奨学金事業)
・スポーツ振興基金寄付金(課外スポーツ振興)

(2) 研究奨励募金
・研究奨励基金寄付金
専任教員にかかる学術研究および内外研究者との共同研究の奨励を目的とする募金。

(3) キャンパス整備募金
国分寺キャンパス・武蔵村山キャンパスの新規整備および既存施設・設備のリニューアル(耐震構造への対応等含む)を目的とする募金

(4) 東経の森・水と緑の募金
創立120周年記念事業の一環として整備された「東経の森」の維持・整備及びキャンパス内の樹木整備のための募金

(5) ゼミナール等支援募金
学修支援、ゼミ活動活性化支援等のための募金

(6) 修学支援特別奨学寄付金
新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴い二〇二〇年六月に新設した学生の修学支援を目的とした募金。コロナウイルス収束と判断された後の残金は「大学奨学基金」に組み入れ予定。

(7) スポーツ・文化振興募金
創立一二〇周年記念事業募金の使途の一つとして設定したものを、独立した募金として募集する。寄付を希望する各部・各サークルを寄付対象とする。寄付対象部・サークルは以下のとおりです。

■ 体育会
①端艇部　②硬式野球部　③陸上競技部　④剣道部　⑤硬式庭球部　⑥卓球部　⑦バスケットボール部　⑧ワンダーフォーゲル部　⑨アメリカンフットボール部　⑩スキー部　⑪合気道部　⑫弓道部　⑬水泳部　⑭少林寺拳法部　⑮バドミントン部　⑯ヨット部　⑰ソフトテニス部　⑱サッカー部　⑲ラグビー部　⑳ハンドボール部　㉑軟式野球部　㉒射撃部　㉓ゴルフ部　㉔ラクロス部

■ 文化会
㉕アカペラサークル　㉖情報処理研究会　㉗シンガーソングクリエーション　㉘落語研究会

教育振興資金(在学生ご父母・保証人対象)

キャンパス環境の拡充・整備および学修環境の整備

寄付者顕彰制度について

ご寄付をいただいた方々への新たな顕彰制度を制定いたしました。

◎顕彰対象者選出基準

(1) 高額寄付者顕彰(継続)
各種寄付金の累計額が所定の金額に達した個人及び法人を対象とする。
個人で累計寄付金額一〇〇万円以上
法人で累計寄付金額一〇〇〇万円以上

(2) 葵功労者顕彰(新規)
各種寄付金の累計額が所定の金額に達した個人及び法人を対象とする。
個人で累計寄付金額五〇〇万円以上
法人で累計寄付金額一億円以上

◎顕彰方法

(1) 高額寄付者顕彰(右記(1)の基準を満たした場合)
・「寄付者芳名録」に掲載(本学公式サイトへの掲載)する。
・高額寄付者芳銘板(進一層館1階ロビーに設置)にご芳名を刻み永く顕彰する。

(2) 葵功労者顕彰(右記(2)の基準を満たした場合)
・「寄付者芳名録」に掲載(本学公式サイトへの掲載)する。
・高額寄付者芳銘板(進一層館1階設置)にご芳名を刻み永く顕彰する。
・次の名誉称号を付与する。

葵功労章
個人で五〇〇万円以上(累計)のご寄付をいただいた方

葵特別功労章
個人で一〇〇〇万円以上(累計)のご寄付をいただいた方又は一億円以上(累計)のご寄付をいただいた法人
・感謝状と盾を授与する。
・称号に応じた金バッジを贈呈する。

(3) 礼遇について
・「寄付者感謝の集い」を開催し、高額寄付者及び葵功労者を招待する。
・学内刊行物の贈呈、本学図書館の利用。
・大倉学芸振興会が企画する講演会・演奏会等に招待する。

右記の他、葵功労者には、次のとおり礼遇する。
・名誉称号授与式を行う。授与式は大学で行い、式後には理事長・学長との懇談の場を設ける。
・入学式・卒業式等学内式典に招待する。
・年賀等時候の挨拶及び弔慰について対応する。

※募金の詳細については本学公式サイトをご参照ください。
個人情報保護のためWEB掲載を控えさせていただきます。

大学奨学基金への寄付金

安城記念奨学基金への寄付金

アドバンストプログラム推進基金への寄付金

国際交流奨学基金への寄付金

スポーツ振興基金への寄付金

研究・研修奨励基金への寄付金

ゼミナール等支援募金

個人情報保護のためWEB掲載を控えさせていただきます。

修学支援特別奨学寄付金

スポーツ・文化振興募金

教育振興資金

その他の寄付金

現物寄付金

本学が募集している各募金の詳細については、東京経済大学公式サイトをご覧ください。

https://www.tku.ac.jp/donation/

東京経済大学へのご寄付をお考えの方はこちらからお願いいたします。

https://fundexapp.jp/tku/entry.php

各部・サークルへのご寄付をお考えの方

● インターネットからのクレジット決済による寄付をお考えの方は、上記二次元コードより本学寄付金公式サイトの寄付目的「スポーツ・文化振興募金」を選択いただき、下段の支援先欄から希望の部・サークル名をご選択ください。

振り込みによるご寄付をお考えの方

● ゆうちょ銀行からお振込みをご希望の方は、校友センター募金室までご連絡ください。専用振込用紙をお送りいたします。

ゆうちょ銀行、銀行から直接お振込みをされる方は、以下の口座番号となります。

ゆうちょ銀行

口座番号 00180-2-263663

加入者名 学校法人東京経済大学寄付金口

三菱 UFJ 銀行

支店名 国分寺支店　口座番号 (普) 0283543

口座名義 学校法人東京経済大学寄付金口

寄付金に関するお問い合わせはこちらまでお願いいたします

総合企画部校友センター募金室　TEL 042-328-6100　MAIL bokin@s.tku.ac.jp

大学食堂の30%値引きに関して各種メディアで取り上げられました

本学は2022年9月21日（水）の第2学期授業開始にあわせ、大学生協食堂の全商品ならびに生協が提供するお弁当全品を、定価の30%を値引きし提供開始しました。この取り組みは、コロナ禍や物価高騰による経済状況の悪化を受け、学生の困窮度合いが高まっていると考え、学生への直接的な支援策の一つとして実施しているものです。本件はNHKニュース「首都圏ネットワーク」「ニュース7」、TBSテレビ「Nスタ」「News23」、毎日新聞、東京新聞など各種メディアで取り上げられました。

経済学部 長岡貞男教授の著書が第65回日経・経済図書文化賞を受賞

2022年11月3日（木・祝）に第65回日経・経済図書文化賞が発表され、経済学部 長岡貞男教授の著書『発明の経済学』（日本評論社）が受賞しました。

本書は、長岡教授のこれまでのイノベーションに関する研究をまとめた本格的な研究書で、発明者の行動、発明の事業化、特許制度という3つの視点から発明について総合的に分析しており、この分野の研究を行う際の基本文献になると考えられると評されています。また選考に際しては、イノベーションはどのようにして生まれるのかという、本質的な問題をめぐる長年の地道な研究がまとめられた1冊である点が高く評価されました。

第123回葵祭 3年ぶりに対面形式で開催

2022年10月28日（金）～30日（日）の3日間、国分寺キャンパスにて大学祭「葵祭」が開催されました。第123回となる今年は3年ぶりに対面形式で行われ、10月28日の前夜祭は約230人が、本祭（10月29日～10月30日）は約3,940人が参加し、構内は賑わいを見せました。今年度のキャッチフレーズは「葵想天外」で、葵祭実行委員会によると、新型コロナウイルスの収束がみえない現状でも東経大生らしく誇りを持ち、個性的でかつ普通には思いつかないような大学祭にしたいという思いを込めたそうです。

屋内では、サークルやゼミ団体が作品展示などで日頃の活動成果を公開しました。また屋外には焼きそばや大学芋などの飲食を中心とした屋台が並び、来場者らを呼び込んだり、楽しそうに調理したりする学生の姿が見られ、活気にあふれました。5号館前に作られたメインステージでは、豪華賞品が当たるビンゴ企画や新次郎池親善大使を決める公開オーディションなどが行われ、盛り上がりを見せました。

経営学部 小木紀親ゼミで「ぶんぶんキャラベリー」を開発

「国分寺物語」や「こくべジプロジェクト」を通じて地域活性化に貢献してきた小木ゼミは、コロナ禍で関係が希薄になった地元と新しいかたちでつながりを持つべく「こくべジプロジェクト」に働きかけ、大学が所在する国分寺市の名産品ブルーベリーを使い、地元農家とJA東京むさし、鈴木栄光堂と協力してソフトキャラメルを商品化しました。

「ぶんぶんキャラベリー」は、大学生協の他国分寺市内数か所で販売されています。

大学をご支援くださる皆さまを顕彰する制度を新設 寄付者顕彰式を執り行いました

本学は、寄付を通じて本学の教育・研究を支えてくださる皆さまを顕彰する制度を新設し、2022年10月29日（土）に寄付者顕彰式を執り行いました。

本学を支えてくださる皆さまの中でも、寄付を通じて大学にひときわ大きな貢献をくださった皆さまを葵特別功労賞、葵功労章と称して顕彰し、ご都合立ていただき式典に出席された1企業と5名の方に大学を代表し菅原寛貴理事長より記念の盾とバッジを贈呈しました。

東京経済大学を影日向となり共に歩んでくださる皆さまの期待に応えるべく、今後とも教職員一体となって大学の発展に尽くしてまいります。

大倉記念学芸振興会 学術講演会「日本の地名にちなんだ初の地質年代『チバニアン』の誕生」を開催

大倉喜八郎記念東京経済大学学術芸術振興会（略称：大倉記念学術振興会）は2022年11月5日（土）、国分寺キャンパス2号館B301教室にて学術講演会を開催しました。今回は茨城大学理学部長で日本地質学会の会長も務める岡田誠教授を講師にお招きし、「日本の地名にちなんだ初の地質年代『チバニアン』の誕生」をテーマに、「千葉セクション」がGSSP：Global Boundary Stratotype Section and Point（国際境界模式層断面とポイント）に認定され「チバニアン」という地質時代名がつけられるまでの道のりについて講演いただきました。

講義では「地層がどのようにできるのか」という基本から、GSSPや地質年代の決定法といった専門的な内容まで、分かりやすく解説が行われました。また、モンタルバーノ・イオニコ（イタリア）、ヴァレ・ディ・マンケ（イタリア）、千葉セクション（日本）の3つの候補地によるGSSPの認定をめぐっては、2015年の時点では千葉セクションが最有力候補であったものの、2016年にモンタルバーノ・イオニコが地磁気逆転の指標を発表したことで最有力候補となり、さらにヴァレ・ディ・マンケがより詳細な調査を行うため締め切りを2017年に延期することを提案し、その間に千葉セクションが花粉や地磁気逆転を調べたことで再び最有力候補となりGSSPに認定された、というチバニアンが誕生するまでの想像を超える過程が語られ、参加者らは熱心に耳を傾けていました。

令和4年 公認会計士試験に5名が合格！

2022年11月18日（金）に令和4年公認会計士試験の合格発表が行われ、本学在学生3名と今年9月に卒業した2名、計5名が合格しました（2022年11月21日現在）。この5名は、会計専門職を目指す学生を支援する「会計プロフェッショナルプログラム」に所属する（していた）学生です。公認会計士・監査審査会によると、今回の論文式試験受験者数は4,067人、合格者数は1,456人、合格率は7.7%でした。

本学のアドバンストプログラムの一つ「会計プロフェッショナルプログラム」は、公認会計士や税理士、国税専門官の在学中合格を目指す学生へ、大学の正課授業との連携や専門学校の講座受講料を大学が負担することなどにより、難関資格突破を目指す学生を支援するものです。

令和4年公認会計士　論文式試験合格者

経済学部4年　木村　元昭さん
経済学部3年　小林　和生さん
経営学部3年　山田　力さん
2022年9月卒業生　小杉　優斗さん
2022年9月卒業生　佐々木　涼我さん

卒業生団体「葵流通会」総会と懇談会を3年ぶりに対面開催

小売業や卸売業、製造業など流通業界で活躍する東京経済大学の卒業生で構成される団体「葵流通会」の総会と懇談会を、2022年11月10日（木）にアルカディア市ヶ谷で3年ぶりに対面開催しました。葵流通会は学生の就職支援と、同じ業界で働く卒業生同士の交流・情報交換等を目的に設立され、今年で20周年を迎えました。本会の会長は新たに河村宣行氏（株式会社不二家代表取締役社長）が就任するなど、今後20年を見据えた役員体制となりました。

総会では2021年度の活動報告と新役員の紹介、新会長の挨拶が行われました。その後行われた懇談会には在学生60名（内、流通業界から内定を受けた4年生4名）、卒業生32名が参加しました。参加者が卒業生や内定者全員と交流できるよう4つのグループに分け、在学生が順に移動し話を聞いて回るという形式で交流が行われた際は、積極的に質問する在学生へ卒業生や内定者が熱心に回答し、制限時間20分4クールでは足りないほどでした。最後は流通業界の企業から内定を受けた4年生4名が、それぞれ在学生にアドバイスやメッセージを伝え、懇談会を企画した関係者へ感謝の気持ちを込めた拍手で締めくくりました。

新会長に就任した河村宣行氏は「学生、卒業生のどちらも親しみを持つ不二家のお菓子を通して両者をつなぎ、皆さんのお役に立てられるよう恩返しをしたい」と思いを語りました。

経済学部 石川雅也ゼミ、3年ぶり3度目の栄冠！第18回日銀グランプリ最優秀賞を受賞

6年連続で日銀グランプリの決勝進出を決めていた経済学部の石川雅也准教授のゼミが、2022年11月23日（水・祝）に日本銀行本店で開催された決勝大会にて、3年ぶり3度目の最優秀賞の栄冠を手にしました。石川准教授は「ご協力いただいた先生方など多くの方々のサポートの中、学生たちの頑張りが最高の形で報われて、私としても本当に嬉しいです」とメッセージを寄せました。

過去2年は決勝まで進むも、惜しくも最優秀賞には手が届かず涙をのんできたこともあり、石川ゼミをはじめ学内も喜びに沸きました。

「第18回日銀グランプリ～キャンパスからの提言～」最優秀賞

タイトル：　こそなえNISAで子育てNI、SA（差）をつけよう～所得控除を用いた早期からの資産運用支援策～
受賞チーム：　経済学部 石川雅也ゼミナール
受賞メンバー：　蓑部恭伽さん（経済3年）、角寛人さん（経済3年）、安達一護さん（経済2年）、飯野泰生さん（経済2年）、割田瑞生さん（経済2年）

『東京経済大学百二十年史 資料編第二巻』刊行記念講演会のご案内

開催日：2023年3月11日（土）13時～15時30分
場　所：東京経済大学国分寺キャンパス
　　大倉喜八郎 進一層館 フォワードホール
テーマ：「大学改革の時代　― 1980～1990年代の東経大」

講　演：「大学をめぐる状況の変化と本学の対応」　村上勝彦名誉教授
　　「コミュニケーション学部をめぐるエピソード」　田村紀雄名誉教授
　　「現代法学部開設と大学改革」　島田和夫名誉教授
参加費：無料（事前申込制　定員160名）

問い合わせ先　東京経済大学史料室　電話 042－328－7955　FAX 042－328－5900　siryou@s.tku.ac.jp

こちらの二次元コードより申込可能です

TKU古本募金にご協力ください

古本募金は、皆さまが読み終えた本の査定額が寄付金となり、奨学金として東経大生の学業を支える仕組みです。

TKU古本募金申込サイトよりWEB申込をしてください。
（WEB申込をご利用いただけない場合は、電話による図書館代行申込が可能）

古本募金について

TKU古本募金に関するお問い合わせ
東京経済大学 図書課
[E-mail] library@s.tku.ac.jp　[TEL] 042-328-7764

寄付・免税措置に関するお問い合わせ
東京経済大学 校友センター募金室
[E-mail] bokin@s.tku.ac.jp　[TEL] 042-328-6100

2017年12月に始動しました「TKU古本募金」プロジェクトは、2022年10月31日現在、325件・1,124,650円（累計）のご寄付をいただきました。
皆さまのご厚情に深く感謝申し上げます。

NEW

2018年度卒業生対象 卒業後アンケートの実施について

本学卒業生のキャリアの状況や在学中に身に付けた能力等について、卒業後アンケートを実施します。アンケート結果をもとに教育の効果を検証し、今後の教育活動等をさらに発展できるよう検討していきます。
今回のアンケート対象は、2018年度卒業生で、実施期間は2023年1月25日（水）から2月28日（火）を予定しています。対象年度の卒業生の皆さまにつきましては、ぜひ、ご協力くださいますようお願いします。

東京経済大学報 第55巻第2号（新春号）アンケート

アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で10名様に東経大グッズをプレゼントさせていただきます。
右の二次元コードから、ぜひご回答をお願いします。

東京経済大学　www.tku.ac.jp

第55巻　第2号　2023年1月発行
発行・編集　東京経済大学広報課　〒185-8502 東京都国分寺市南町1-7-34
誌面に関する問合わせ：広報課
[TEL] 042-328-7724　[E-mail] pr@s.tku.ac.jp
冊誌の発送停止・発送先変更：校友センター
[TEL] 042-328-6100　[E-mail] tokeikiyukai@s.tku.ac.jp